

【天国への手紙 2022年9月3日(土)放送分】

タイトル…葬儀

ラジオネーム 忠(ただし)

父さん、すまなかつた。

来月、6回目の命日が来るが、命日のたびに申し訳無いという気持ちがいこみ上げてくる。

遺言らしいものをほとんど残さなかつた父さんが、唯一、生前に言ったのが、葬儀のやり方だつた。

特別に凝つた方法ではなく、むしろ、シンプルに済ませてやつたあの世へ旅立とう、というサバサバした性格の父さんらしい内容だつた。

ただ、実際に臨終を迎えてみると、そのシンプルが難しかつた。葬儀会場の調整や、弟たちの仕事の都合がどうしてもつかない。俺も、じっくり考えるだけの気持ちの余裕がなく、

結局は、オーソドックスな形の葬儀にせざるを得なかつた。。。

バタバタと7日間が過ぎ、しよなか初七日の法要を終えた日から、

2晩連続で父さんの夢を見た。

1日目は、真つ暗闇の中で、少し離れたところから俺を見ていた。今まで見たことの無いような無念そうな、悲しそうな目だつた。

2日目は、これもまた今まで見たことの無いような、怒りに満ちた表情で俺に殴りかかつてきた。

2日とも、言葉は一切発していなかつた。夢を見て、俺は2日とも夜中に飛び起きた。暑い季節でもないのに、汗でびっしょりだつた。

夢の中で俺を殴つて、せいせいしたのかどうかは分からないが、それ以降、父さんの夢を見たことはない。

実際に父さんが夢枕に立つたのか、それとも、俺が勝手に見た夢なのかはわからない。夢のことは、母さんにも弟たちにも話したことはない。

正直、葬儀についてはどうしてあげるのが正解だつたのか、今でもわからない。ただ、父さんの人生最後の願いを叶えてあげなかつたことは、後悔しかない。生きている間に、もっとしっかり話し合つておくべきだつた。

リクエスト曲 石原裕次郎「北の旅人」